

商店街の歩行空間における個々の建物や街路による街並みの調和についての研究 —横浜市中区関内地区の馬車道を対象として—

1663111 中西 豊

指導教員 高見沢実教授 野原卓准教授 尹莊植助教

1. 本研究について

街並みの魅力向上に向けた取り組みは現在までに多くの地域や地区で行われており、街並みの魅力向上が通り全体の価値や魅力の向上にも繋がっている。特に、商店が多く立ち並ぶ通りでは、通りの活性化に向けて街並みの魅力向上は重要視すべき目標だと考えられ、実際の街並みとしては、建物や店舗の持つ賑やかさや個性が失われないような、個々の様相がある程度の多様さを保ちながらも通りの調和を感じられるものが望ましいと考えられる。

本研究では、そのような調和した街並みを感じられる馬車道を対象地として、その調和の実態について分析し、商店が多く立ち並ぶ通りにおける街並みの魅力づくりについての示唆を得ることを目的とする。

研究の方法としては、1章で研究背景・目的・方法について述べる。2章では馬車道の街並みを構成要素に分けて調査を行い、その実態について把握する。3章では調査結果を基に分類を行い、それに対して調和の評価を行うことで、歩行空間の構成要素と調和との関係性を分析する。4章では、調和と評価できた部分と街並みの実態を重ね合わせ、その関係性についても分析する。最後に5章で馬車道における街並みの調和の実態についてまとめる。

2. 馬車道の概要と歩行空間の実態調査

歩行空間における街並みについて、鉛直面と水平面の構成面に分けて考えることとした(下図)。鉛直面では構成面(i)、水平面では構成面(ii)及び(iii)がそれぞれ考えられたため、これらを調査対象とし、それぞれにおける構成要素を調査項目^{*1}とした(下表)。

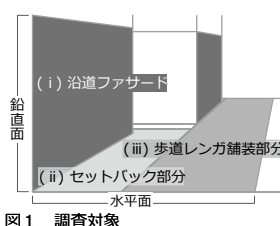


表1 調査対象と調査項目

調査対象	調査項目
(i)沿道ファサード (西側20箇所、東側24箇所) (全44箇所)	色(色相・明度・彩度) 素材 開口率 屋外広告物の占有率
(ii)セットバック部分 (西側11箇所、東側18箇所) (全29箇所)	色(色相・明度・彩度) 素材
(iii)歩道レンガ舗装部分	

図1 調査対象

その結果、(i)では色・素材・屋外広告物の占有率、(ii)では色相・明度・素材が一定の範囲にある程度集中しており、他の構成要素は幅広く見られた。対象への分布を見ると、幅広く見られる構成要素に加え、一定の範囲に集中している構成要素も対象への分布の様子がそれぞれ異なることから、全体ではある程度のまとまりは持ちながらも、1つ1つの対象で見ると多様な様相を示していることがわかった。

3. 歩行空間の調和に関する分析

街並み及び街路景観に関する既往研究を参考に、歩行空間における鉛直面・水平面について、その相隣関係において対応する構成要素の類似と感覚的な調和の評価との関係性について分析を行うこととした。

3.1 相隣関係による分類

隣り合う各構成面の組合せについて、①～④を対象に、その相隣関係を見ることとした(下図)。

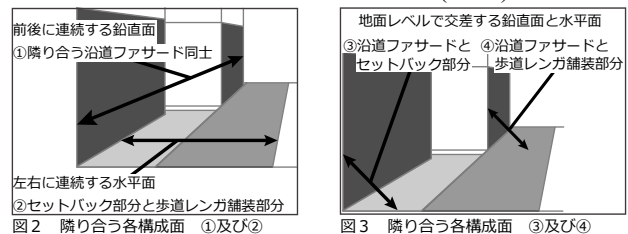
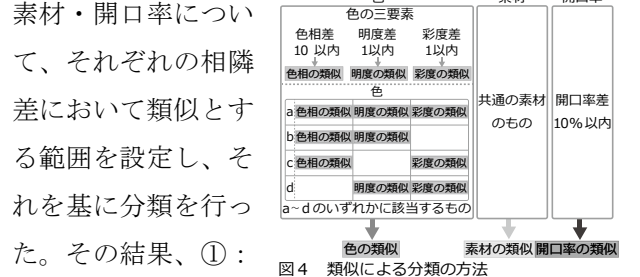


図2 隣り合う各構成面 ①及び②

図3 隣り合う各構成面 ③及び④

既往研究における設定方法や考察¹²を参考に、調査を行った各構成要素の中で、色(色相・明度・彩度)・素材・開口率について、それぞれの相隣差において類似とする範囲を設定し、それを基に分類を行った。その結果、①：



②：全29組中16組 ③：全32組中15組 ④：全12組中1組が、それぞれ何らかの構成要素が類似しているものに分類できた。

3.2 類似による分類と調和との関係性

3.1で類似と分類できた組について、実際の歩行空間でもその様相が近くなっている状態を、相隣関係

①隣り合う沿道ファサード同士の相隣関係 類似による分類

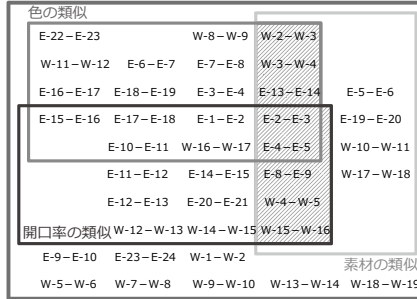


図5 ①の相隣関係 類似による分類と調和との関係

②セットバック部分と歩道レンガ舗装部分の相隣関係 類似による分類

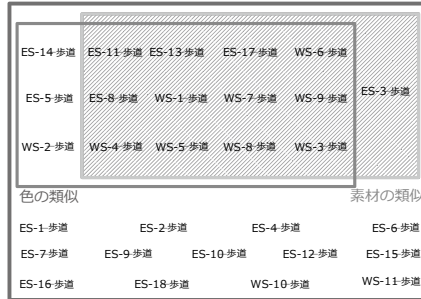


図6 ②の相隣関係 類似による分類と調和との関係

③沿道ファサードとセットバック部分 相隣関係 類似による分類

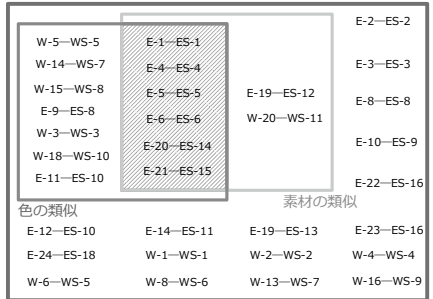


図7 ③の相隣関係 類似による分類と調和との関係

での調和とすると、組合せ①～③について、それぞれ、主に複数の構成要素が類似している組について、その大半が調和していると評価できた(上図斜線部)。これについては、分類を行ったそれぞれの構成要素が実際の様相に影響を与えていることから、1つのみではなく複数の構成要素が類似することで、よりその様相が近いものになると考えられた。

4. 調和と街並みの実態との関係性の分析

組合せ①～③で調和していると評価できた組(上図斜線部に該当する組)に対して、それらの分布と通りとの関係性についての分析を行った。

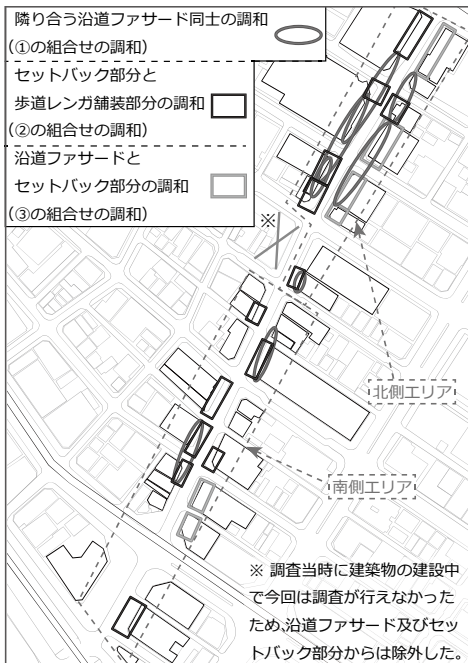


図8 調和している組の分布 ①～③全体

組合せ①～③の調和を全体で見ると、それぞれが所々重なり合いながらも、通り全体に分布していた。

組合せ別で見ると、②セットバック部分と歩道レンガ舗装部分(左右に連続する水平面同士の組み合わせ)の調和が、西側の通りをはじめとして通りの南北に広く現れていた。①の調和は主に通りの北側、③の調和は東側の通りに分布していた。

構成面別で調和している組の分布をみると、構成

面(ii)のセットバック部分で、②の調和や③の調和に繋がっているものが通り全体に多く見られた。

エリア別で分布の様子を見ると、北側では①の調和をはじめとして①～③の調和が多く見られ、街並みとしては、歴史的建造物と、それに連続する周囲のファサードが調和している様子等が見られた。南側では②及び③の調和が多く見られ、街並みとしては街区の沿道側を一つの建物が占める、大規模な建物のセットバック部分でそのような調和が見られた。

5. 結論

馬車道の街並みでは、その構成面の相隣関係での調和が見られ、それらは主に複数の構成要素が類似していることと関係していた。また、相隣関係での調和の分布と馬車道の通り全体との関係を見ると、組み合わせ毎の調和の分布が上手く重なり合い、通り全体に分布していた。また、個々の構成面では、ある程度のまとまりを持ちながらも多様な様相となっていることもあり、多様さを持ちながらも調和が感じられる街並みが通り全体に広がっていた。

また、構成面の組み合わせ別で見ると、セットバック部分と歩道レンガ舗装部分の調和が通りの南北に広く分布している。これらが、歩道のレンガ舗装が南北に続いていることと相まって、歩行者が連続的に感じる街並みにおいて通り全体としての一体感や調和を生み出していると考えられる。

※1 調査項目における開口率及び屋外広告物の占有率は、沿道ファサードの全面積に対する開口部及び屋外広告物の占める合計の面積の割合を表し、開口部及び屋外広告物とは、それぞれ下図に含まれるものとする。

主な参考文献(脚注番号と対応)

- 木多道宏、奥俊信、舟橋國男、鈴木毅、小浦久子「街路景観における色彩の心理効果—連続する建物群の基調色および単一建物の強調色の変化と「まとまり」評価等との関係—」日本建築学会計画系論文集第522号、pp239-246、1999年8月
- 横究、山本早里、飯島祥二、武藤浩「街路景観評価における色彩調和論の有効性の検討」日本色彩学会誌21(2)、pp62-73、1997-05

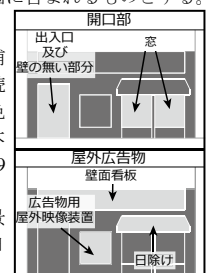


図9 開口部と屋外広告物